〈巻頭言〉

二人の「みなしご」

三木　紀人

鎌倉初期の高僧慈円は藤原摂関家の生まれで、天台座主などを歴任、宗教および政治の世界でもっとも時めいた人であった。しかし、その絢爛たる人生の裏に深い淋しさがひそんでおり、それを表現した和歌が約六千首伝わっている。その内の一首

みなしごのたぐひ多かる世なれども
ただ我のみと思ひ知られて

は、彼が二十代に入って、青年僧として難行苦行にとりくんでいた頃の作である。

慈円が上の句で歌っているのは、天変地異や戦乱のあいつぐこの時代の世相である。人々はあわただしく死なねばならず、そのあとに残された孤児はたしかに多かったと思われる。慈円は、その情況を見ながら、自分のみが孤児であるかのような錯覚を持ちつづけたようである。反面、彼は民間の貧しい孤児たちと違ってきわめて恵まれた境遇にあり、両親は幼少時に失ったが、栄達していく同母兄が三人もおり、兄弟相互の結束は固かった。にもかかわらず「ただ我のみ」と感じてしまうのは、慈円が孤独感や自我意識のなみなみでない人であったことの現れで、両親の喪失は、その気質形成の原因というよりも、彼の感情を促進し、深化する、いわば第二次的体験であったのではなかろうか。

慈円と同世代の鴨長明についても似たようなことが言える。彼は晩年に遁世し、『方丈記』という傑作を書いて歴史に残った人であるが、遁世に先立っ

て歌人として活躍し、その頃のことが、知人源家長の日記に記されている。家長ははるかに年下であるが、その彼の印象に残る長明は、「みなしご」としての逆境に堪えつつけなげに生きる男であったという。同じ把え方は長明の若き日の師の言にも見え、長明への理解に際して、彼の孤児性が一つの鍵であったらしいことがうかがえる。

ただし、「みなしご」とは、言葉の正しい使い方によるなら「こ（子）」の一種にほかならないはずであるが、長明が父を失ったのは十八、九歳の時で（母については不明だが、それ以前か）、当時のならわしからすると、成人してからのことと思われる。つまり、長明は「みなしご」と呼ばれるにふさわしくないのである。従って、この語で彼の特性が示されているのは不思議といえよう。

慈円と長明はもちろん「みなしご」としてきそいあったわけでもなく、一方がもう一方に影響を与えたわけでもなさそうである。たまたま似たようなものを共有していたのであろう。彼らは実感にもとづいて人間を淋しい存在と理解し、その理解を深めるための方法として、実質以上に自分を逆境に置いて何かを考えることになったのかもしれない。保護者がなく未成熟な者が世界にさらされるとどのようになるか。また、その者の目に世界や人生がどのように映るか。慈円や長明の作品にそうした問いや、これへの答が、折りにふれて見え隠れし、われわれの共感や感動を誘うのである。

たまたま私が関心を持つ二人を例にとったが、古今東西の歴史に類例は多いであろう。彼らは、いわば淋しさの底からさまざまのものを発見したが、幼児教育で望まれているような「よりよい教育環境」（幼稚園教育要領）で育った人間は何をいつ発見していくことになるか。期待と不安をこもごも持ちつつ、幸福そうな園児たちを見つめることがある。

（お茶の水女子大学）